

Oracle® Solaris 11 ご使用にあたって

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are “commercial computer software” pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1 始める前に	11
Oracle Solaris 11 について	11
Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 への移行	12
インストールの考慮事項	12
Oracle Solaris 11 をインストールするためのシステム要件	12
LiveCD のインストール後に root の初期パスワードの期限が切れている	13
更新に関する考慮事項	14
システムの Oracle Solaris 11 Express から Oracle Solaris 11 への更新	14
実行時の考慮事項	15
GCC 4.5.2 パッケージでは include-fixed ヘッダーファイルは提供されない	15
システムのノード名がループバックの IP アドレスにマップされている	15
CLI メッセージのローカリゼーション	16
/usr/ccs/bin は /usr/bin へのシンボリックリンクになっている	16
BIND 9.6 がローカルでないネットワークへの再帰を拒否する	16
WU-FTP から ProFTP への移行	17
2 インストールに関する注意事項	19
インストールに関するバグ情報	19
ディスク容量が少なくメモリー割り当ての多いシステム上で、自動インストーラによるインストールが失敗する (7090030)	19
umask の制限が強いために、AI クライアントのブートが wanboot.conf エラーで失敗する (7052679)	21
SPARC: テキストインストール時にネットデバイス名と通信デバイス名が不正にマップされる (7097656)	21
テキストインストーラでは、既存の Solaris2 パーティション内の別のスライスに Oracle Solaris 11 をインストールすることはできない (7091267)	22

zoneadm install コマンドにディレクトリを渡すと、そのツリーの下にある重複した名前を持つプロファイルが削除される (7093399)	23
自動インストーラのマニフェストがすべてのユーザーから読み取り可能な状態でインストールされる (7097115)	24
aimanifest コマンドを使用して新しい要素を追加する場合、直接の次の要素が見つからないと処理が失敗する (7093788)	25
nge ドライバを含む x2100 プラットフォームでネットワークベースの自動インストーラが失敗する (6999502)	27
sysconfig およびテキストインストーラアプリケーションがタイムゾーン画面から予期しないかたちで終了する (7026383)	27
デュアルパスのブートディスクを使用すると、自動インストーラによるターゲットディスクのマッチングが失敗する (7079889)	28
FMA ディスクトポロジ検出が、直接接続されたディスクと仮想ディスクが混在する構成を処理しないことがある (7093885)	29
プロファイルを選択するには、ホスト名条件とクライアントから返されたホスト名が厳密に一致する必要がある (7098861)	29
テキストインストーラが、別の言語が選択されていても英語で表示される (7095437)	30
Oracle VM Server for SPARC: 古いシステムファームウェア上では、ゲストドメインの WAN ブートと自動インストーラが遅くなる (6969316)	30
AI サーバーでの複数の AI サービス名の競合 (7042544)	31
DNS が有効化されていない場合に installadm create-service が不完全な DHCP 構成を作成する (7087888)	32
txzonemgr がラベル付きゾーンを複製できない (7107525)	33
ハードウェア関連の問題	33
CPU 電源管理の間違った BIOS エントリにより、システムパニックが発生する可能性がある (7096091)	33
SPARC: Oracle Solaris 11 をブートするためにシステムのファームウェアを更新する必要がある (7058642)	34
3 実行時に関する注意事項	37
システム構成に関する問題	37
カスタム SMF サイトプロファイルをサブディレクトリ内に配置する必要がある (7074277)	37
sysconfig create-profile が共有 IP ゾーンのネットワークの構成に失敗する (7090563)	38
-c オプション付きの sysconfig configure コマンドでディレクトリ構造がフラット化される (7094123)	38
非大域ゾーンで構成解除が失敗する (7101169)	39

sysconfig create-profile がローカルユーザーアカウントの作成を許可しない (7097083)	40
システム管理に関する問題	40
複数の USB キーボードを同時に抜くと、システムパニックが発生する (7076162)	40
IB HCA または RDSv3 IB クライアントの unconfigure 操作が失敗する (7098279)	40
新しいブート環境を作成するときに、元のブート環境の GRUB menu.lst のエントリのうち、最初のエントリのみが作成される (7093604)	41
JRE がシステムのデフォルトタイムゾーン設定の検出に失敗する (7092679)	41
man コマンドの -f オプションが -k オプションと同等である (7093992)	42
zoneadm attach コマンドが、-a および -n オプションの使用時にハングアップする可能性がある (7089182)	42
分割されたマニフェストで svccfg validate コマンドが失敗する (7054816)	42
ilomconfig サービスによってシステムのブートで遅延が発生する可能性がある (7100050)	43
xterm-256color 端末タイプがサポートされていない (7099457)	44
ゾーンの準備ができているときはゾーンブート環境データセットがマウントされているべきである (7091692)	44
接続されている IEEE-1394 デバイスを切り離したり、電源切断したりすると、システムパニックになる (7070912)	45
automount サービスが無効になっていると、useradd が、ホームディレクトリにアクセスできないユーザーを作成する (7070558)	45
SPARC: ダイレクト I/O を使用してマルチソケット T シリーズシステム上の主ドメインから複数の PCIe スロットを削除すると、ブート時にシステムパニックになることがある (7100859)	46
tar コマンドによるテープからのアーカイブの抽出が失敗する (7028654)	47
SPARC: SP が縮退モードの場合にシステムのブートが失敗する (6983290)	47
ネットワーク接続に関する注意事項	47
cxge ドライバの別名が既存ドライバの別名と競合する (7054074)	48
-s オプション付きの dladm show-aggr コマンドが機能しない (7094923)	48
ローカルのホームディレクトリがマウントされないことがある (7082515)	48
制御ドメインに仮想スイッチを追加したあと、最初のブートで datalink-management サービスがタイムアウトする (7087781)	49
ipadm コマンド (7103136)	49
DefaultFixed プロファイルが有効になっていない場合は ipadm コマンドが機能しない (7105597)	50
ストレージに関する問題	50

fc-fabric SMF サービスを無効にすると、システムのブートで問題が発生する (6988653)	50
iSCSI または SAS デバイスで SCSI-2 reserve コマンドを利用すると、システムパニックが発生する (7075285)	51
デスクトップに関する問題	51
新規インストール後に Evolution アプリケーションがクラッシュする (7077180)	51
SPARC: USB キーボード、マウス、および物理モニターに関するデスクトップの問題 (7024285)	52
グラフィックスと画像処理に関する問題	53
x86: NVIDIA グラフィックスによるレイヤーアクセラレーションによって Firefox が終了する可能性がある (7095998)	53
Intel グラフィックスチップセットでビットマップコンソールが正しく表示されない (7097468)	54
x86: NVIDIA グラフィックスチップセット上でビットマップコンソールが正しく表示されない (7106238)	54
ローカリゼーションに関する注意事項	55
UTF-8 以外のロケールで、非 GTK アプリケーションから ATOK 言語エンジンへの接続が失敗する (7082766)	55
Trusted Extensions 環境での入力方式の問題	55
4 更新の問題	57
更新のバグ	57
パッケージマネージャーを使用して Oracle Solaris 11 Express を Oracle Solaris 11 に更新できない (19022)	57
更新中にディレクトリが空でないか、または予期しないメッセージが表示される (7019792)	57
廃止されたパッケージに対して依存関係を持つ製品 (7106586)	58
CUPS が、Oracle Solaris 11 のデフォルトの印刷サービスとして LP 印刷サービスを置き換える	59
更新後に、syslog が /etc/ ail/aliases.db 別名データベースが古いと報告する (7096745)	60
未構成ロケールファセットでのデフォルト言語の問題 (7073516)	60

はじめに

『Oracle Solaris 11 ご使用にあたって』では、Oracle Solaris 11 をインストールまたは実行する前に考慮すべきいくつかの重要なインストール、実行時、および更新情報を提供します。このリリースでのいくつかの既知の問題と、回避方法が存在する場合はその回避方法について説明します。また、このリリースに関連するいくつかのインストール、実行時、および更新情報も提供します。

このドキュメントは、Oracle Solaris 11 のすべての既知の問題を扱っているわけでも、あらゆるインストール、実行時、または更新の問題に関する詳細情報を提供しているわけでもありません。

このリリースの新機能については、[Oracle Solaris 11 新機能](#) を参照してください。

Oracle Solaris 11 に関する詳細情報の入手先については、[表 1-1](#) を参照してください。

ソフトウェアのサポート中止の宣言については、<http://www.oracle.com/technetwork/systems/end-of-notices/eonsolaris11-392732.html> を参照してください。

注 - この Oracle Solaris のリリースでは、SPARC および x86 系列のプロセッサアーキテクチャーを使用するシステムをサポートしています。サポートされるシステムは、<http://www.oracle.com/webfolder/technetwork/hcl/index.html> の『Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists』に記載されています。『Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists』ドキュメントには、プラットフォームタイプ間のあらゆる実装の違いが記載されています。

対象読者

本書は、Solaris に関する知識を持つ方、現在習得中の方を対象に、Oracle Solaris 11 OS をインストールして使用するために必要な情報を提供します。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通じて電子的なサポートを利用することができます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照してください。聴覚に障害をお持ちの場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
<code>AaBbCc123</code>	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	<code>.login</code> ファイルを編集します。 <code>ls -a</code> を使用してすべてのファイルを表示します。 <code>system%</code>
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	<code>system%su</code> <code>password:</code>
<i>AaBbCc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、 <code>rm filename</code> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	<code>sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'</code>

Oracle Solaris OS に含まれるシェルで使用する、UNIX のデフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを次に示します。コマンド例に示されるデフォルトのシステムプロンプトは、Oracle Solaris のリリースによって異なります。

- C シェル


```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

◆ ◆ ◆ 第 1 章

始める前に

この章では、Oracle Solaris 11 の概要情報を提供するほか、Oracle Solaris 11 をインストールまたは実行する前に考慮する必要のあるインストールおよび実行時の一般的な考慮事項について説明します。インストールおよび実行時の考慮事項が、この章ですべて説明されているわけではありません。

Oracle Solaris 11 について

Oracle Solaris 11 は、大規模なクラウド環境や企業のデータセンターでサービスを安全かつ迅速に配備する機能を提供します。

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムは、管理を簡素化し、設計済みの仮想化によって迅速なアプリケーションプロビジョニングを可能にし、スケーラブルなデータ管理によるデータ完全性を保証し、最高レベルのセキュリティによる高度な保護を提供するために、いくつかの新機能を提供しています。Oracle Solaris 11 は Oracle ソフトウェアとともに設計され、Oracle ハードウェア用に最適化されています。

Oracle Solaris 11 の機能についての詳細は、[Oracle Solaris 11 新機能](#) を参照してください。

Oracle Solaris 11 OS を使用するとき、または Oracle Solaris 11 OS に移行するときは、次のドキュメントを参照してください。

表 1-1 より詳細な情報の記載箇所

トピック	参考
Oracle Solaris 11 のインストールと設定	Oracle Solaris 11 入門
インストールサーバーまたはその他の単一システム環境の設定	『Oracle Solaris 11 システムのインストール』

表 1-1 より詳細な情報の記載箇所 (続き)

トピック	参考
基本的かつ一般的な管理タスクの実行	『Oracle Solaris の管理: 一般的なタスク』
Oracle Solaris 11 へのアップグレード	『Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 への移行』
サポートリポジトリへのアクセス	https://pkg-register.oracle.com/
初期のソフトウェアリリースリポジトリへのアクセス	http://pkg.oracle.com/solaris/release/
Oracle Solaris 11 のすべてのドキュメント	Oracle Solaris 11 Documentation Library

注-ハードウェア構成によっては、Oracle Solaris OS のインストール時に別途作業が必要になることがあります。Oracle Solaris の追加のインストールドキュメントについては、ハードウェアのドキュメントを確認してください。

Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 への移行

Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 に移行する場合にはおそらく、このリリースの新機能や変更された機能に関する疑問がいくつか出てきます。『Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 への移行』ガイドでは、新しい主要機能や変更された主要機能について説明しているほか、Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 へのスムーズな移行を行いやすくするための具体的な手順を示しています。

インストールの考慮事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11 のインストール時に考慮する必要のある一般的な情報を提供します。

Oracle Solaris 11 をインストールするためのシステム要件

Oracle Solaris 11 をインストールする前に、次のメモリーとディスク容量の要件を確認してください。

注 - この表では、Oracle Solaris 11 の初期インストールを実行するための最小要件と推奨要件の一覧を示します。インストール後のシステムで追加のメモリーやディスク容量が必要になる場合もあります。

表 1-2 インストールシステムの要件

インストールプログラム	最小メモリー	最小ディスク容量	推奨ディスク容量
LiveCD	1G バイト	5G バイト	7G バイト
テキストインストーラ	1G バイト	2.5G バイト	4.5G バイト
自動インストーラ	1G バイト	自動インストールに必要な最小ディスク容量は、インストールに含めるパッケージの数やサイズによって変わります。	13G バイト

サポートされるシステムやプラットフォームタイプ間の実装の違いについては、<http://www.oracle.com/webfolder/technetwork/hcl/index.html> 『Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists』を参照してください。

LiveCD のインストール後に **root** の初期パスワードの期限が切れている

LiveCD インストール後、**root** のパスワードは最初、インストール中に作成されたユーザーアカウントと同じパスワードに設定されていますが、これは期限切れの状態で作成されています。はじめて **root** 役割になるときは、独自のパスワードを使用して認証を行うようにしてください。この時点でユーザーは、ユーザー **root** のパスワードの期限が切れていることを示すメッセージを受け取り、新しいパスワードの入力を要求されます。

GNOME のメニュー項目から管理コマンドを起動したあとで **root** 役割になることを求められた場合、新しい **root** パスワードの入力も求められます。su コマンドを使用して役割になる場合のコマンドシーケンスは、次のようになります。

```
$ su
Password:
su: Password for user 'root' has expired
New Password:
Re-enter new Password:
su: password successfully changed for root.
```

更新に関する考慮事項

このセクションでは、システムを Oracle Solaris 11 に更新するときに考慮する必要のある情報について説明します。

システムの Oracle Solaris 11 Express から Oracle Solaris 11 への更新

Oracle Solaris 11 Express を Oracle Solaris 11 に更新するには、`pkg` コマンド行ユーティリティーを使用します。詳細は、`pkg(1)` のマニュアルページを参照してください。

注 - 更新中に Oracle Solaris 11 Express からパッケージマネージャユーティリティー `packagemanager(1)` を使用して更新することはできません。パッケージマネージャは、システムが更新されたあとでのみ使用します。

▼ Oracle Solaris 11 Express を Oracle Solaris 11 に更新する方法

- 1 最新のパッケージを使用して Oracle Solaris 11 Express Image Packaging System (IPS) を更新します。

- システムがサポート契約下にある場合は、次のコマンドを使用して、システムのパッケージングソフトウェアが更新されていることを確認します。

```
# pkg update
```

このコマンドは、Oracle Solaris 11 に更新するために必要なサポートを含む Oracle Solaris 11 Express Support Repository Update (SRU) バージョン 13 以降にシステムを更新します。

- システムがサポート契約下でない場合は、次のコマンドを使用して、システムのパッケージングソフトウェアが更新されていることを確認します。

```
# pkg update pkg:/package/pkg
```

どちらの場合も、新しく更新されたパッケージによって新しいブート環境が作成されます。

- 2 新しいブート環境を有効にするためにシステムをリブートします。

```
# init 6
```

- 3 システムを Oracle Solaris 11 に更新します。

```
# pkg update --accept
```

新しいブート環境が作成され、必要な新しいパッケージがインストールされます。

- 4 新しいブート環境を有効にするためにシステムをリブートします。

```
# init 6
```

実行時の考慮事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11 OS の実行中に考慮する必要のある一般的な情報を提供します。

GCC 4.5.2 パッケージでは **include-fixed** ヘッダーファイルは提供されない

GCC 4.5.2 パッケージでは、`include-fixed` GCC インストールディレクトリ内にヘッダーファイルが自動生成されません。ANSI 互換でないヘッダーファイルを含むアプリケーションのビルド時に、コンパイラのエラーメッセージが表示される可能性があります。

回避方法: 影響を受けるヘッダーファイルを生成するには、次のコマンドを入力します。

```
# processor='uname -p'  
# [ $processor = "i386" ] && platform="pc" || platform="oracle"  
# /usr/gcc/4.5/lib/gcc/$processor-$platform-solaris2.11/4.5.2/install-tools/mkheaders
```

システムのノード名がループバックの IP アドレスにマップされている

Oracle Solaris 11 リリース以降ではデフォルトで、`/etc/inet/hosts` 構成ファイル内で、システムのノード名がループバック IP アドレスエントリにマップされています。例:

```
:::1 mysystem localhost  
127.0.0.1 mysystem localhost localhost
```

回避方法: (省略可能) システム管理者は手動で `/etc/inet/hosts` ファイルを編集し、システムノード名からループバック IP アドレスエントリへのマッピングを削除できます。システムのいずれかのネットワークインタフェースの IP アドレスに、ノード名をマップします。

CLI メッセージのローカライゼーション

Oracle Solaris では、コマンド行インタフェース (CLI) のメッセージはすべてローカライズされるわけではありません。オペレーティングシステム CLI コンポーネントのためのメッセージは不完全にローカライズされているため、デフォルトではインストールされなくなりました。

回避方法: オペレーティングシステム CLI コンポーネントのためのメッセージを表示するには、`system/osnet/locale` パッケージを手動でインストールします。

`/usr/ccs/bin` は `/usr/bin` へのシンボリックリンクになっている

Oracle Solaris 11 リリース以降、`/usr/ccs/bin` は `/usr/bin` へのシンボリックリンクになります。

この変更のため、たとえば `PATH` 環境変数内の `/usr/ccs/bin:/usr/gnu/bin:/usr/bin` というパスは、`/usr/bin:/usr/gnu/bin` と同等になりました。この変更により、`PATH` 検索によって見つかるユーティリティーも変わる可能性があります。

`/usr/ccs/bin` の変更によって GNU ユーティリティーの検索に問題が発生する場合には、`PATH` 環境変数の並びを見直して `/usr/gnu/bin` を `/usr/bin` よりも前に配置する、またはユーティリティーをフルパスで呼び出すようにしてください。

BIND 9.6 がローカルでないネットワークへの再帰を拒否する

BIND 9.6-ESV-R3 リリースを使用すると、デフォルトの再帰サーバー設定により、以前はローカルでないネットワークへの再帰的な検索が可能だったサーバーが大幅に制限されます。

回避方法: サーバーでのキャッシュや再帰へのアクセスが許可されるホストとネットワークを適合させるアクセス制御リスト (ACL) を作成します。

例:

```
acl "trusted" {
    192.168.0.0/16;
    10.153.154.0/24;
    localhost;
    localnets;
};
options {
    ...
```



```
allow-query { any; };  
allow-recursion { trusted; };  
allow-query-cache { trusted; };  
...  
};
```

この例では、trusted ACLには、アクセスを必要とするサンプルネットワークとして 192.168.0.0/16 と 10.153.154.0/24 が含まれています。これらのサンプルネットワークを、使用している環境を正しく反映するネットワークに置き換える必要があります。これらの ACL を使用すると、だれでも信頼できるデータをサーバーで検索できますが、キャッシュと再帰にアクセスできるのは trusted ACL 内のホストのみです。

WU-FTPD から ProFTPD への移行

Oracle Solaris 11 は、以前の Oracle Solaris リリースで使用されている WU-FTPD FTP サーバーの代わりに ProFTPD サーバーをサポートしています。新しいリリースでは、ProFTPD FTP サーバーの構成とデフォルト動作が変更されています。

詳細は、`/usr/share/doc/proftpd` ディレクトリの `proftpd_migration.txt` ファイルを参照してください。

インストールに関する注意事項

この章では、Oracle Solaris 11 のインストール中に発生する可能性のある問題と、推奨される回避方法が存在する場合はその回避方法について説明します。

インストールに関するバグ情報

Oracle Solaris 11 のインストール時またはインストール後に発生するバグ情報について説明します。

ディスク容量が少なくメモリー割り当ての多いシステム上で、自動インストーラによるインストールが失敗する (7090030)

自動インストーラ (AI) を使用して Oracle Solaris 11 をインストールする場合、システムの物理メモリーの量がディスク領域よりも多いと、インストールが失敗する可能性があります。スワップデバイスやダンプデバイスに領域を割り当てると、Oracle Solaris のインストール時に使用できる容量が少なくなる可能性があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
ImageInsufficientSpace: Insufficient disk space available (???.? GB) for  
estimated need (???.? GB) for Root filesystem
```

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- ディスクのサイズに制限がない場合は、ルートプール内の `vdev` として使用されるスライスに、より多くの領域を割り当てます。

注-x86 システムの場合は必要に応じて、Solaris2 パーティションに追加領域を割り当てます。

- ダンプボリュームとスワップボリュームを割り当てないですむようにします。AI マニフェスト内で、<target> セクションの<logical> タグの nodump 属性と noswap 属性に値 true を指定します。例:

```
<logical noswap="true" nodump="true">
</logical>
```

- マニフェスト内で、zpool を定義し、より小さいサイズのスワップとダンプを割り当てます:

```
<target>
  <disk whole_disk="true" in_zpool="rpool">
    <disk_keyword key="boot_disk"/>
  </disk>
  <logical>
    <zpool name="rpool" root_pool="true">
      <zvol name="swap" use="swap">
        <size val="2gb"/>
      </zvol>
      <zvol name="dump" use="dump">
        <size val="4gb"/>
      </zvol>
    </zpool>
  </logical>
</target>
```

- スワップデバイス、ダンプデバイスのいずれかの割り当てを無効にし、残りのデバイス (ダンプまたはスワップ) に特定のサイズを割り当てます。次の例は、スワップを無効にし、4G バイトのダンプサイズを追加する方法を示したものです。

```
<target>
  <disk whole_disk="true" in_zpool="rpool">
    <disk_keyword key="boot_disk"/>
  </disk>
  <logical noswap="true">
    <zpool name="rpool" root_pool="true">
      <zvol name="dump" use="dump">
        <size val="4gb"/>
      </zvol>
    </zpool>
  </logical>
</target>
```

AI マニフェストを編集する方法についての詳細は、ai_manifest(4) のマニュアルページを参照してください。

umask の制限が強いために、AI クライアントのブートが wanboot.conf エラーで失敗する (7052679)

インストールサービスの作成時に umask が制限の強い値に設定されていると、そのインストールサービスは、AI クライアントからアクセスできない構成ファイルとともに作成されてしまいます。このため、AI クライアントが次の wanboot エラーで失敗する可能性があります。

```
{0} ok boot net:dhcp - install
Boot device: /pci@400/pci@2/pci@0/pci@6/network@0:dhcp File and args: -
install1000 Mbps full duplex Link up
Timed out waiting for BOOTP/DHCP reply
HTTP: Bad Response: 500 Internal Server Error
(wanboot.conf error: Can't open configuration file)
ERROR: boot-read fail
```

Boot load failed.

```
{0} ok
```

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- installadm を実行してインストールサービスを作成する前に、umask を 022 のような、より制限の弱い値に設定します。例:

```
# umask 022
# installadm create-service -n svc1 -s /export/aimages/S11_AI.ISO \
-d /export/auto_install/svc1
```

- インストールサービスがすでに作成済みの場合、そのサービスの wanboot.conf ファイルと system.conf ファイルのアクセス権を調整します。次の例では、インストールサービス名は svc1、イメージのパスは /export/auto_install/svc1 になっています。

```
# chmod 644 /var/ai/service/svc1/system.conf
# chmod 644 /export/auto_install/svc1/wanboot.conf
```

SPARC: テキストインストール時にネットデバイス名と通信デバイス名が不正にマップされる (7097656)

テキストインストーラを使用して Oracle Solaris 11 をインストールするときに、手動ネットワーク構成を選択すると、ネット名と通信デバイスのマッピングが正しく行われません。

たとえば、「手動ネットワーク構成」画面でネット名と通信デバイス名が次のようにマップされます。

```
net0 (igb2)
net1 (igb3)
net2 (igb0)
net3 (igb1)
net4 (usbemc2)
```

この例では、net2であるデバイス igb0 を選択できます。しかし、igb0 デバイスはインストール後に net0 としてマップされる可能性があります。この不一致のため、インストール後にネットワーク接続が失われます。

注 - この問題は、Oracle Solaris 11 パッチ (SRU バージョン 3) で解決されました。x86 または SPARC 用のブート可能な SRU3 イメージを使用した場合は、この問題は発生しません。

回避方法: この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. インストール時に、テキストインストーラの初期メニューからオプション 3 (シェル) を選択します。

注 - 初期メニューに戻るには、テキストインストーラを終了する必要があります。

2. シェルプロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
# svcadm restart datalink-management:default
# dladm show-phys -L
# exit
```

3. 初期メニューに移動し、オプション 1 を選択して Oracle Solaris 11 をインストールします。

「手動ネットワーク構成」画面に正しいマッピングが表示されます。

テキストインストーラでは、既存の Solaris2 パーティション内の別のスライスに Oracle Solaris 11 をインストールすることはできない (7091267)

テキストインストーラでは、既存の Solaris2 パーティション内のスライスに Oracle Solaris をインストールすることはできません。この問題は、その同じパーティション内の別の単一スライス上または一連のスライス上のデータを保持することを選択した場合のみ発生します。

テキストインストーラの「fdisk パーティション内のスライスを選択します」画面では、Solaris2 パーティション内の1つの既存スライスが rpool タイプとして表示されます。F5 キーを使用して、未使用スライスのタイプを rpool に変更することはできません。

既存の rpool スライス上のデータを破棄するのでないかぎり、インストーラを終了する必要があります。この問題は、システム内のほかの変更には影響を与えません。

回避方法: テキストインストーラを使用するには、別のディスクに Oracle Solaris をインストールする必要があります。既存の Solaris2 パーティション内の空き容量のある別のスライスにインストールするには、カスタマイズされたマニフェストとともに自動インストーラ (AI) を使用します。カスタマイズされた AI マニフェストでは、インストールに使用するスライスを指定します。

たとえば、既存の Solaris2 パーティションのスライス7上の s11-rpool ルートプールに Oracle Solaris をインストールするには、カスタマイズされた AI マニフェストの targets セクションで、次のように指定します。

```
<target>
  <disk>
    <disk_name name="c3d0" name_type="ctd"/>
    <partition action="use_existing_solaris2">
      <slice name="7" in_zpool="s11-rpool">
        <size val="6144mb"/>
      </slice>
    </partition>
  </disk>
  <logical>
    <zpool name="s11-rpool" is_root="true">
      <filesystem name="export" mountpoint="/export"/>
      <filesystem name="export/home"/>
      <be name="solaris"/>
    </zpool>
  </logical>
</target>
```

zoneadm install コマンドにディレクトリを渡すと、そのツリーの下にある重複した名前を持つプロファイルが削除される (7093399)

zoneadm install コマンドの -c オプションでは、ディレクトリをパラメータとして指定できます。このディレクトリには、システム構成プロファイルが格納されたサブディレクトリを含めることができます。

このディレクトリの構造はフラット化されるため、ディレクトリ構造内に同じ名前のファイルが存在していると、それらのファイルの1つだけがインストール対象のゾーンにコピーされます。

たとえば、次のディレクトリツリーがあるとします。

```
directory-name/profiles1/sc_profile.xml
directory-name/profiles2/sc_profile.xml
directory-name/profiles3/sc_profile.xml
```

このとき、次の `zoneadm install` コマンドを実行するとします。

```
# zoneadm -z zone install -c directory-name
```

ユーザーが次の各コマンドを順番に発行したかのように、ディレクトリ構造内のファイルが新しいゾーンにコピーされます。

```
# cp directory-name/profiles1/sc_profile.xml \
    zoneroot/etc/svc/profile/site/sc_profile.xml
# cp directory-name/profiles2/sc_profile.xml \
    zoneroot/etc/svc/profile/site/sc_profile.xml
# cp directory-name/profiles3/sc_profile.xml \
    zoneroot/etc/svc/profile/site/sc_profile.xml
```

結果として、後続の各コピーによって以前のコピーが上書きされ、1つのファイルのみが残されます。したがって、インストール後にシステムが正しく構成されません。

回避方法: プロファイルのコピー時にプロファイルが互いに上書きし合わないよう
に、各プロファイルの名前が、ディレクトリ構造内でのそのプロファイルの位置に
かかわらず一意であることを確認します。たとえば、次のディレクトリ構造がある
とします。

```
directory-name/profiles1/sc_profile_a.xml
directory-name/profiles2/sc_profile_b.xml
directory-name/profiles3/sc_profile_c.xml
```

`zoneadm` コマンドを実行すると、次のようにファイルがゾーンにコピーされます。

```
zonerooot/etc/svc/profile/site/sc_profile_a.xml
zonerooot/etc/svc/profile/site/sc_profile_b.xml
zonerooot/etc/svc/profile/site/sc_profile_c.xml
```

自動インストーラのマニフェストがすべてのユーザーから読み取り可能な状態でインストールされる (7097115)

自動インストーラで使用される XML マニフェストファイルは、自動インストーラサーバー上のすべてのユーザーから読み取り可能です。これらのファイルには、自動インストーラの HTTP マニフェストサービスを介してネットワーク経由で自由にアクセス可能です。構成マニフェストの一部として指定されるパスワードは安全ではありません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- 自動インストーラサーバーでのマニフェストの読み取り権限を制限するには、次のコマンドを使用します。

```
# chmod -R og-r /var/ai/*/AI_data
```

- Oracle Solaris の IP フィルタ機能を使用します。この機能は、マニフェストサービスポートへのアクセスを特定のネットワークまたはクライアントのみに制限する場合に役立ちます。
- 自動インストーラを使用してシステムをインストールしたあとの最初のブート時にログインし、自動インストーラによって構成されたパスワードを変更します。セキュリティを確保するには、システムをシングルユーザーモードでブートします。

SPARC ベースのシステムでは、ブートコマンドに `-s` オプションを追加します。

x86 システムでは、GRUB メニューを対話式で編集し、`kernel$` コマンドに `-s` オプションを追加します。

aimanifest コマンドを使用して新しい要素を追加する場合、直接の次の要素が見つからないと処理が失敗する (7093788)

自動インストーラマニフェストの変更は、Derived Manifest スクリプトから `aimanifest(1M)` コマンドを使用して行います。

`aimanifest(1M)` の `add` または `load` サブコマンドを使用して新しい要素またはサブツリーを AI マニフェストに追加する場合、新しい要素またはサブツリーのルートがその兄弟要素間の誤った位置に配置される可能性があります。次のすべての条件を満たす場合、新しい要素またはサブツリーのルートは、兄弟要素のリストの末尾が正しい位置でない場合でも、その位置に追加されます。

- 新しい要素の追加先となる親の下に、ほかの要素が存在している。
- 新しい要素の追加先となる親の下に、同じタグを持つ要素がほかに存在していない。
- 新しい要素に続く要素が1つも存在していない。

結果として、マニフェストの検証が失敗する可能性があります。AI の実行時や `/system/volatile/install_log` ファイル内で、派生マニフェストモジュール (DMM) チェックポイントの失敗として似たようなエラーメッセージが見つかる可能性があります。

```
16:48:04: aimanifest: INFO: command:add,
path:/auto_install/ai_instance/
target/logical/zpool[@name=rpool]/filesystem@name,
value:zones
```

```

16:48:04:   aimanifest: INFO: cmd:success,
validation:Fail,
node:/auto_install[1]/ai_instance[1]/
target[1]/logical[1]/zpool[1]/filesystem[1]

16:48:05 Derived Manifest Module: script completed successfully

16:48:05 Derived Manifest Module: Manifest header refers to no DTD.

16:48:05 Derived Manifest Module: Validating against DTD:
/usr/share/install/ai.dtd.1

16:48:05 Validation against DTD
/usr/share/install/ai.dtd.1] failed

16:48:05 /system/volatile/manifest.xml:6:0:ERROR:VALID:DTD_CONTENT_MODEL:
Element zpool content does not follow the DTD,
expecting
(vdev* , filesystem* , zvol* , pool_options? , dataset_options? , be?),
got (be filesystem )

16:48:05 Derived Manifest Module: Final manifest failed XML validation

16:48:05 Error occurred during execution of 'derived-manifest' checkpoint.

16:48:05 Aborting: Internal error in InstallEngine

ERROR: an exception occurred.

Derived Manifest Module: Final manifest failed XML validation

```

回避方法: AI マニフェストを異なる順序で、あるいは一連の異なる add または load サブコマンドを使用して構築することにより、新しい要素またはサブツリーが正しい順番で追加されるようにします。この順番は、/usr/share/install ディレクトリ内の DTD ファイルによって決まります。AI マニフェストの検証時には次の DTD ファイルが使用されます。

- ai.dtd.1
- target.dtd.1
- boot_modes.dtd.1
- software.dtd.1

ミラー要素を追加する前にすべての起点要素を追加します。たとえば、発行元の起点要素とミラー要素を設定する場合に、software.dtd.1 ファイルに含まれる次の行は、ミラー要素が起点要素のあとに来る必要があることを示しています。

```
<!ELEMENT publisher (origin+, mirror*)>
```

nge ドライバを含む x2100 プラットフォームでネットワークベースの自動インストーラが失敗する (6999502)

nge ドライバを含む x2100 プラットフォームでネットワークベースの自動インストーラを使用して Oracle Solaris をインストールすると、長時間経過したあとで次のエラーメッセージが表示される可能性があります。

```
kernel$ /s11-173-x86/platform/i86pc/kernel/$ISADIR/unix -B install_media=http://
$serverIP:5555//install/images/s11-x86,install_service=s11-173-x86,install_svc_address=
$serverIP:5555
loading '/s11-173-x86/platform/i86pc/kernel/$ISADIR/unix -B install_media=http://
$serverIP:5555//install/images/s11-x86,install_service=s11-173-x86,install_svc_address=
$serverIP:5555'
module$ /s11-173-x86/platform/i86pc/$ISADIR/boot-archive
loading '/s11-173-x86/platform/i86pc/$ISADIR/boot-archive' ...
```

```
Error 20: Multiboot kernel must be loaded before modules
```

```
Press any key to continue...
```

これは、nge ドライバを含む x2100 BIOS での PXE インストールの問題です。この問題は、BIOS version 1.1.1 以降で発生します。

回避方法: nge ドライバを含む x2100 プラットフォームに Oracle Solaris をインストールするには、次のいずれかの回避方法を選択します。

- メディアからインストールします。
 - 自動インストーラのメディアを使用します。
 - テキストインストーラを使用します。
 - LiveCD を使用します。
- nge ドライバの代わりに bge ドライバを使用します。
- BIOS を version 1.0.9 に変更します。

sysconfig およびテキストインストーラアプリケーションがタイムゾーン画面から予期しないかたちで終了する (7026383)

次のいずれかの操作を実行すると、sysconfig とテキストインストーラアプリケーションがタイムゾーン画面から予期せず終了することがあります。

- Ctrl キーを押しながら L キーを押します。
- F9 キーを押し、「取消し」ボタンを選択します。

この問題は、次のいずれかのゾーン地域を選択した場合のみ発生します。

- アフリカ
- アメリカ
- アジア
- ヨーロッパ
- 太平洋

注-アプリケーションが終了する前にユーザーが行った選択は、一切保存されません。

回避方法: この動作を避けるには、これらのアプリケーションをタイムゾーン画面から終了しようとししないでください。次の回避方法を使用してください。

- テキストインストーラを実行していた場合は、インストールのメインメニューに自動的に戻ります。このメインメニューから、「Oracle Solaris をインストールする」オプションを選択してテキストインストーラを再起動します。
- `sysconfig` アプリケーションを実行していた場合は、次を行います。
 1. 空のパスワードを使用して `root` としてログインします。
 2. リブートし、対話式の構成プロセスを初めから再開します。

デュアルパスのブートディスクを使用すると、自動インストーラによるターゲットディスクのマッチングが失敗する (7079889)

デュアルパスの FC ブートディスクに Oracle Solaris OS をインストールすると、次のエラーでインストールが失敗します。

```
2011-08-16 18:41:38,434 InstallationLogger.target-selection DEBUG
Traceback (most recent call last):
File "/usr/lib/python2.6/vendor-packages/solaris_install/auto_
install/checkpoints/target_selection.py", line 3419, in execute
self.select_targets(from_manifest, discovered, dry_run)
```

```
2011-08-16 18:41:38,642 InstallationLogger INFO
Automated Installation Failed
```

```
2011-08-16 18:41:38,693 InstallationLogger INFO
Please see logs for more information
```

```
2011-08-16 18:41:38,743 InstallationLogger DEBUG
Shutting down Progress Handler
```

回避方法: デュアルパス SAS JBOD ケーブルのいずれか 1 つを切り離します。

FMA ディスクトポロジ検出が、直接接続されたディスクと仮想ディスクが混在する構成を処理しないことがある (7093885)

障害管理アーキテクチャ (FMA) ディスクトポロジ検出および列举プロセスが、直接接続されたディスクと仮想ディスクの組み合わせた構成を正しく処理しないことがあります。その結果、直接接続されたドライブが自動インストーラインストールユーティリティから見えなくなります。

回避方法: Oracle Solaris 11 テキストまたはライブインストーラインストールユーティリティを使用してインストールを実行します。すべてのディスクドライブが選択のために表示されます。

プロファイルを選択するには、ホスト名条件とクライアントから返されたホスト名が厳密に一致する必要がある (7098861)

自動インストーラ (AI) を使用してクライアントのインストールを行う場合、カスタマイズされたシステム構成プロファイルに `hostname` 条件が関連付けられていないと、そのプロファイルが適用されない可能性があります。AI クライアントは完全修飾ドメイン名、修飾されていないホスト名のいずれかを受け取る可能性があります。そのどちらになるかは、ネットワーク上でネームサービスがどのように構成されているかにより異なります。プロファイルの作成中に指定された `hostname` 条件がクライアントからの `hostname` 値に正確に一致しない場合、プロファイルを照合しようとしても失敗します。

プロファイルの名前が `profile-name` で、`ai_sd_log` ログファイルに次の行が含まれていない場合、そのプロファイルは見つかっていません。

```
SC profile locator: Processing profile profile-name
```

注 `-ai_sd_log` ログファイルは、クライアントをリポートする前は `/system/volatile` ディレクトリ内に、リポートしたあとは `/var/sadm/system/logs` ディレクトリ内に、それぞれ含まれています。

回避方法: 問題の原因が、AI サーバーと AI クライアント間でのホスト名の不一致であることを確認するには、`ai_sd_log` ログファイル内で次の文字列の有無をチェックします。

```
hostname=hostname
```

テキストインストーラが、別の言語が選択されていても英語で表示される (7095437)

Web ベースのリモート KVM や VirtualBox コンソールなどの、物理コンソールと同等のコンソール上でテキストインストーラを使用するときは、インストールメディアからのブート中に別の言語を選択した場合でも、インストーラはテキストを英語で表示します。インストーラのテキストが英語で表示されるのは、非 ASCII 文字が文字化けして表示されるのを防ぐためです。

テキストインストーラは、シリアルコンソールと同等のコンソール (たとえば、SSH または telnet に基づいたサービスコンソール) 上でのみローカライズされたテキストを表示します。

回避方法: ありません。

Oracle VM Server for SPARC: 古いシステムファームウェア上では、ゲストドメインの WAN ブートと自動インストールが遅くなる (6969316)

Oracle の SPARC T シリーズサーバーのユーザーは、古いバージョンのシステムファームウェアを実行している場合、自動インストーラ (AI) を使用したゲストドメインの自動インストール中に遅い WAN ブートを経験することがあります。

回避方法: システムファームウェア 8.x の場合は、少なくともバージョン 8.1.1.b 以上が必要です。システムファームウェア 7.x の場合は、少なくともバージョン 7.4.0.d 以上が必要です。

次の一覧は、プラットフォームと必要なファームウェアバージョンを示していません。システムファームウェアの特定のバージョンについての詳細は、Oracle VM Server for SPARC のリリースノートを参照してください。

システムファームウェア 8.x は、次のプラットフォームをサポートしています。

- Sun SPARC T3-1
- Sun SPARC T3-2
- Sun SPARC T3-4
- Sun SPARC T3-1B
- Netra SPARC T3-1
- Netra SPARC T3-1B
- Sun SPARC T4-1
- Sun SPARC T4-1B
- Sun SPARC T4-2
- Sun SPARC T4-4

システムファームウェア 7.x は、次のプラットフォームをサポートしています。

- Sun SPARC Enterprise T5120
- Sun SPARC Enterprise T5140
- Sun SPARC Enterprise T5220
- Sun SPARC Enterprise T5240
- Sun SPARC Enterprise T5440
- Sun Blade T6320 - Sun Blade T6340

次のプラットフォームでは、必要なファームウェアバージョンを利用できません。

- Netra SPARC T3-1BA
- Netra CP3260

AI サーバーでの複数の AI サービス名の競合 (7042544)

複数のネットワークにサービスを提供するように構成された AI サーバー上で、mdns デーモンから、AI サービス名の同一のインスタンスが登録されているという警告が発行される可能性があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
mDNSResponder: [ID 702911 daemon.error]
Client application registered 2 identical instances of service some-service._
OSInstall._tcp.local. port 5555.
```

```
mDNSResponder: [ID 702911 daemon.error]
Excessive name conflicts (10) for some-service._
OSInstall._tcp.local. (SRV); rate limiting in effect
```

注-AI クライアントは引き続き、インストールに必要な情報を取得できます。

回避方法: 複数の AI サービス名の競合を回避するには、`svc:/system/install/server:default` SMF サービスの `exclusion` または `inclusion` プロパティを設定します。

次の例では、システム上で構成されたすべてのネットワークが含まれるように `all_services/exclude_networks` および `all_services/networks` プロパティを設定する方法を示します。

```
# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
setprop all_services/exclude_networks = false

# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
delprop all_services/networks #1.#1.#1.#1/#1
```

```
# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
delprop all_services/networks #2.#2.#2/#2

...

# svccfg -s svc:/system/install/server:default \
addprop all_services/networks 0.0.0.0/0

# svcadm refresh svc:/system/install/server:default
# svcadm restart svc:/system/install/server:default

#1.#1.#1.#1/#1と#2.#2.#2.#2/#2は、構成されているネットワークインタフェース
のIPアドレスです。
```

DNS が有効化されていない場合に **installadm create-service** が不完全な DHCP 構成を作成する (7087888)

オプションの DHCP 構成を含む新しいインストールサービスを作成するときに **installadm** サービスが新しい DHCP サーバーを作成する必要がある場合、DNS クライアントが構成されていないときは **installadm** サービスは不完全な DHCP 構成ファイルを生成します。

この動作は、**installadm** サービスが、DHCP 構成ファイル内の DNS 構成情報にさらにラベルを追加することが原因で発生します。ただし、その追加ラベルの値は DHCP 構成では使用できません。

構成ファイルが不完全であるため、DHCP サービスがオンライン状態を達成できず、保守状態に解決される可能性があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
Name services are not configured for local DHCP server.
Manual configuration will be required, please see dhcpd(8) for further information.
```

回避方法: ローカル DHCP サーバーをオンライン状態に切り替えるには、次の手順を実行します。

1. `/etc/inet/dhcpd4.conf` ファイルを変更し、次の行を削除します。

```
option domain-name;
option domain-name-servers;
```

2. 次のコマンドを入力して DHCP サーバーを再起動します。

```
# svcadm clear svc:/network/dhcp/server:ipv4
```

svcadm コマンドで `restart` オプションを使用すると、DHCP サーバーがオンライン状態に変更され、自動インストール処理が開始されます。次のコマンドを使用すると DHCP サーバーの状態を確認できます。


```
# svcs -Ho state svc:/network/dhcp/server:ipv4
```

注 - create-service のほかの処理はこの失敗の影響を受けないため、追加の回避策は一切不要です。

txzonemgr がラベル付きゾーンを複製できない (7107525)

ラベル付きゾーンを複製したあと、ゾーンがブートに失敗します。この失敗の理由は、`/var` ファイルシステムのデータセットに、ゾーンのラベルではなく `ADMIN_LOW` というラベルが付いていることです。そのため、ゾーン内で `read-write` としてマウントできません。次のエラーメッセージが表示されます。

```
ERROR: Cannot boot zone. The system was unable to verify that the zone doesn't contain old or incompatible packages within the zone.
```

`zfs list` コマンドを使用して、ゾーンの `/var` ファイルシステムに対応するデータセットの名前を判断します。次に、次のコマンドを入力します。

```
# zfs set mlslabel=none var-dataset
```

`var-dataset` は対応するデータセットの名前です。

ハードウェア関連の問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11 のハードウェア関連の問題について説明します。

CPU 電源管理の間違った BIOS エントリにより、システムパニックが発生する可能性がある (7096091)

パフォーマンス状態またはスロットリング状態への遷移時にシステムの BIOS から CPU 電源管理に関する間違った情報が提供されると、システムパニックが発生する可能性があります。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- BIOS の設定で CPU 電源管理を無効にします。
- CPU 電源管理が正しく記述されたバージョンに BIOS をアップグレードします。

SPARC: Oracle Solaris 11 をブートするためにシステムのファームウェアを更新する必要がある (7058642)

一部の SPARC システムでは、Oracle Solaris 11 をブートするためにファームウェアを更新する必要があります。更新されていないシステムでは、システムのブート時に次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
os-io Cross trap sync timeout:
```

回避方法: Oracle Solaris 11 OS をインストールする前に、影響を受けるシステムのファームウェアを少なくともバージョン 6.7.11 に更新します。次の表は、Oracle Solaris 11 を実行するときに、影響を受ける SPARC システムに必要な最小ファームウェアレベルを示しています。

表 2-1 SPARC システムに必要なファームウェアレベル

SPARC プラットフォーム	FW リビジョン	パッチ
T2000	6.7.11	139434-08
T1000	6.7.11	139435-08
Netra T2000	6.7.11	139436-07
Netra CP3060	6.7.11	
T6300	6.7.11	139438-08
T5120/T5220	7.4.0.b	147307-01
T6320	7.4.0.b	147308-01
Netra T5220	7.4.0.b	147309-01
Netra CP3260	7.4.0.b	
T5140/T5240	7.4.0.b	147310-01
T5440	7.4.0.b	147311-01
T6340	7.4.0.b	147312-01
Netra T5440	7.4.0.b	147313-01
Netra T6340	7.4.0.b	147314-01
T3-1	8.1.0.c	147315-02
T3-2	8.1.0.c	147316-02
T3-4	8.1.0.c	147317-02

表 2-1 SPARC システムに必要なファームウェアレベル (続き)

SPARC プラットフォーム	FW リビジョン	バッチ
T3-1B	8.1.0.c	147318-02
Netra T3-1	8.1.0.c	147319-02
Netra T3-1B	8.1.0.c	147320-01
Netra T3-1BA	8.1.0.c	
M3000	1102	12573531
M4000	1102	12573537
M5000	1102	12573539
M8000	1102	12573543
M9000	1102	12573546

SPARC システムで必要となるファームウェアレベルの詳細については、[My Oracle Support](#)を参照してください。

実行時に関する注意事項

この章では、Oracle Solaris 11 の実行中に発生する次の既知の問題について説明します。

- 37 ページの「システム構成に関する問題」
- 40 ページの「システム管理に関する問題」
- 47 ページの「ネットワーク接続に関する注意事項」
- 50 ページの「ストレージに関する問題」
- 51 ページの「デスクトップに関する問題」
- 53 ページの「グラフィックスと画像処理に関する問題」
- 55 ページの「ローカリゼーションに関する注意事項」

システム構成に関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11 リリースでの構成に関する問題について説明します。

カスタム **SMF** サイトプロファイルをサブディレクトリ内に配置する必要がある (7074277)

Oracle Solaris インスタンスを構成解除すると、`/etc/svc/profile/site` ディレクトリ内のカスタム SMF サイトプロファイルが削除されます。

回避方法: 構成解除中は、保持するカスタムサイトプロファイルを `/etc/svc/profile/site` ディレクトリのサブディレクトリ内に配置しておきます。

sysconfig create-profile が共有 IP ゾーンのネットワーク構成に失敗する (7090563)

次の sysconfig コマンドを使用してプロファイルを作成すると、システム構成ツール (SCI) でネットワーク構成画面が表示されません。

```
# sysconfig create-profile
```

この問題が発生は、共有 IP 用に構成された非大域ゾーンにログインしている場合のみ発生します。SCI ツールはゾーン内のネットワークを一切認識しないため、生成されるプロファイルにはネットワーク情報は含まれません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- ゾーンの外側でプロファイルを生成します。
- 不足している構成情報を生成されたプロファイルに手動で追加します。
- sysconfig create-profile を実行し、共有 IP を含む非大域ゾーンに適したグループ化情報を渡します:

```
# sysconfig create-profile -g location,identity,naming_services,users
```

-c オプション付きの sysconfig configure コマンドでディレクトリ構造がフラット化される (7094123)

sysconfig configure コマンドには、システムを再構成するために、ディレクトリをパラメータとして指定可能な -c オプションが用意されています。このディレクトリには、システム構成プロファイルが格納されたサブディレクトリを含めることができます。

ディレクトリ構造はフラット化されるため、ディレクトリツリー内に同じ名前のファイルが存在していると、それらのファイルのいずれか 1 つを使用してシステムの再構成が行われます。結果として、プロファイルのいずれか 1 つを使用してシステムの再構成が部分的に行われます。たとえば、次のディレクトリ構造があるとします。

```
directory-name/profiles1/sc_profile.xml  
directory-name/profiles2/sc_profile.xml  
directory-name/profiles3/sc_profile.xml
```

sysconfig コマンドを -c オプションを指定して実行すると、プロファイルのいずれか 1 つだけを使用してシステムの再構成が部分的に行われます。

```
# sysconfig configure -c directory-name
```

回避方法: 各プロファイルが、ディレクトリツリー内でのそのプロファイルの位置にかかわらず一意の名前を持つことを確認します。例:

```
directory-name/profiles1/sc_profile_a.xml  
directory-name/profiles2/sc_profile_b.xml  
directory-name/profiles3/sc_profile_c.xml
```

非大域ゾーンで構成解除が失敗する (7101169)

次の2つの場合に、非大域ゾーンで破壊的なシステム構成解除が発生します。

- 新しく複製された非大域ゾーンをブートするとき
- 非大域ゾーンの内側で破壊的な `sysconfig configure` または `sysconfig unconfigure` コマンドを実行する場合

`sysconfig unconfigure` コマンドを `--destructive` オプション付きで使用すると、システムの終了状態は保守モードになります。この保守モードでは、パスワードを要求されずに `root` ユーザーとしてログイン可能なログインプロンプトが提供されます。

```
# sysconfig unconfigure --destructive
```

非大域ゾーンの `svc:/system/config-user` で破壊的な構成解除が失敗します。この場合、構成解除プロセスは、ユーザーやルート構成情報の全体的な構成解除を行うことに失敗します。結果として、保守プロンプトで `root` パスワードなしでログインできません。次のエラーメッセージが表示されます。

```
Unconfiguration failed for svc:/system/config-user:default
```

このエラーメッセージはまた、新しく複製された非大域ゾーンをブートするときや、`sysconfig configure` コマンドを `--destructive` オプションを指定して実行するときにも表示されます。

```
# sysconfig configure --destructive
```

`--destructive` オプション付きの `sysconfig configure` コマンドや複製されたゾーンを使用する場合、その影響は最小限に抑えられます。

どちらの場合も、最終的な状態は、構成済みで正常に動作している非大域ゾーンになります。`/etc/sudoers` ファイル内のエントリが、期待どおりに削除されないことがあります。

回避方法: 非大域ゾーンを構成解除する前に設定されたパスワードを使用して、`root` ユーザーとしてログインします。すべてのエントリを削除するには、`/etc/sudoers` ファイルを編集する必要があります。

sysconfig create-profile がローカルユーザーアカウントの作成を許可しない (7097083)

システム構成プロファイルの作成プロセスを単純化するには、sysconfig(1M) コマンドを次のように使用できます。

```
# sysconfig create-profile
```

sysconfig は、構成画面で入力された情報に基づいてシステム構成プロファイルを生成します。「ユーザー」画面で構成された初期ユーザーアカウントがローカルユーザーアカウントとしてシステム上に存在していると、sysconfig は処理の続行を拒否し、次のエラーメッセージを表示します。

```
<login> cannot be used
```

回避方法: サンプルのシステム構成プロファイルを別のユーザー名で作成し、その生成されたプロファイルを手動で変更します。

システム管理に関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11 のシステム管理に関する問題について説明します。

複数の USB キーボードを同時に抜くと、システムパニックが発生する (7076162)

複数の USB キーボードを同時に抜くと、システムパニックが発生する可能性があります。

回避方法: システムから複数の USB キーボードを抜く場合は、必ず 1 つずつ抜いてください。

IB HCA または RDSv3 IB クライアントの unconfigure 操作が失敗する (7098279)

RDSv3 ドライバで動的再構成がサポートされていないため、InfiniBand ホストチャネルアダプタ (IB HCA) または RDSv3 IB クライアントの unconfigure 操作が失敗します。

RDSv3 DR では次のエラーメッセージが表示されます。


```
# cfgadm -c unconfigure ib::rdsv3,0
This operation will suspend activity on the IB device
Continue (yes/no)? yes
cfgadm: Hardware specific failure:
unconfigure operation failed ap_id: /devices/ib:fabric::rdsv3,0
```

HCA DR では次のエラーメッセージが表示されます。

```
# cfgadm -c unconfigure PCI-EM0
cfgadm: Component system is busy, try again: unconfigure failed
```

回避方法: RDSv3 ドライバを削除し、システムをリブートします。

```
# pkg uninstall system/io/infiniband/reliable-datagram-sockets-v3
```

```
# reboot
```

新しいブート環境を作成するときに、元のブート環境の **GRUB menu.lst** のエントリのうち、最初のエントリのみが作成される (7093604)

新しいブート環境が作成されると、元のブート環境にあったエントリの数にかかわらず、その新しいブート環境の GRUB menu.lst ファイルには1つのエントリのみが含まれます。新しいブート環境のエントリの作成には、元のブート環境の最初の menu.lst エントリが使用されます。その他のすべてのエントリは無視されます。

この問題が発生するのは、beadm、pkg update のいずれかのコマンドを使って新しいブート環境を作成した場合です。新しいブート環境のその他のエントリは使用できません。

回避方法: /rpool/boot/grub/menu.lst ファイルを編集して、目的のエントリを元のブート環境からコピーします。元のエントリ内のブート環境名を、ターゲットのブート環境名に置き換えます。

JRE がシステムのデフォルトタイムゾーン設定の検出に失敗する (7092679)

Java Runtime Environment (JRE) がシステムのデフォルトタイムゾーン設定の検出に失敗し、US/Pacific に対応する GMT-08:00 など、標準時に基づくカスタムタイムゾーンへのフォールバックが発生する可能性があります。結果として、ローカル時間が常に標準時となるほか、このカスタムタイムゾーンでは標準時間やサマータイムの変換は一切サポートされません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- TZ環境変数を、TZ=US/Pacificなどの適切なタイムゾーン名に設定します。詳細については、`environ(5)`のマニュアルページを参照してください。
- `svc:/system/environment:init` SMF サービスインスタンスの `environment/TZ` プロパティを適切なタイムゾーン名に変更したあと、サービスを更新します。

```
# svccfg -s svc:/system/environment:init setprop environment/TZ = timezone-name
# svcadm refresh svc:/system/environment:init
```
- Javaの起動時に `java -Duser.timezone=US/Pacific` のように、`user.timezone` プロパティの値として適切なタイムゾーン名を指定します。

man コマンドの **-f** オプションが **-k** オプションと同等である (7093992)

このリリース以降、`-f` オプション付きの `man` コマンドは、`-k keyword` オプションと同等になります。`man -f` コマンドが、`man` コマンドのマニュアルページに説明されている情報を表示しません。

回避方法: ありません。

zoneadm attach コマンドが、**-a** および **-n** オプションの使用時にハングアップする可能性がある (7089182)

このリリースでは、`zoneadm attach` コマンドの `-n` または `-a` オプションで、ハイフン (-) 記号を使用して `stdin` 引数を指定できません。

回避方法: `stdin` 引数を使用しないでください。

分割されたマニフェストで **svccfg validate** コマンドが失敗する (7054816)

SMF 装飾のために提供された適切な複数マニフェストサポートにより、`svccfg validate` コマンドはもう、見つからない必須のプロパティグループについて警告しなくなります。ただし、分割されたマニフェストでは `svccfg validate` コマンドが失敗します。

この問題は、マニフェストを提供するインスタンスが、別のマニフェスト内でサービスレベルで定義されたサービスメソッドがないために正しく検証されないときに発生します。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
$ svccfg validate /lib/svc/manifest/system/console-login-vts.xml
Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt6";
Name of missing property group="start"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="start"; pg_pattern type="method"

Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt6";
Name of missing property group="stop"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="stop"; pg_pattern type="method"

Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt5";
Name of missing property group="start"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="start"; pg_pattern type="method"

Required property group missing: FMRI="svc:/system/console-login:vt2";
Name of missing property group="stop"; Type of missing property group="method";
Template source="svc:/system/svc/restarter:default";
pg_pattern name="stop"; pg_pattern type="method"

svccfg: Validation failed.
```

この警告は、コンソール上ではなく `manifest-import` サービスログファイル内に表示されます。この警告は致命的ではないため、インスタンスのインポートが妨げられることはありません。インスタンスがインポートされたあと、`svccfg validate` コマンドを使用して、そのインスタンスを手動で正常に検証できます。

回避方法: 分割されたマニフェストで `svccfg validate` コマンドを使用しないでください。

ilomconfig サービスによってシステムのブートで遅延が発生する可能性がある (7100050)

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用するサービスプロセッサや、version 3.0.12 よりも古い Oracle ILOM を使用するサービスプロセッサを持たないデスクトップおよびラップトップシステムでは、`ilomconfig-interconnect` サービスが Oracle ILOM への接続の確立を繰り返し試みます。この繰り返しの試みにより、システムのブート時間で遅延が発生する可能性があります。

回避方法: 次のコマンドを使用して `ilomconfig` サービスを無効にします。

```
# svcadm disable svc:/network/ilomconfig-interconnect
```

xterm-256color 端末タイプがサポートされていない (7099457)

Apple OS X Lion (Mac OS X Version 10.7) に含まれる Terminal.app 端末エミュレータではデフォルトの xterm-256color 端末タイプが使用されますが、この端末タイプは、この Oracle Solaris リリースではサポートされていません。したがって、Apple OS X Lion から Oracle Solaris 11 上でリモート端末セッションを実行した場合、使用可能な端末機能が大幅に制限され、非常に基本的なコマンド行の対話のみが可能となります。

terminfo データベースから端末機能を取得する必要があるアプリケーションが実行されるたびに、エラーメッセージが表示される可能性があります。そのようなエラーメッセージの典型的な例を次に示します。

```
tput: unknown terminal "xterm-256color"  
tabs: xterm-256color: terminfo file not found
```

回避方法: xterm-color 端末タイプを使用するように Terminal.app 端末エミュレータを構成します。次の手順を実行して xterm-color 端末タイプを設定します。

1. Terminal.app アプリケーションにフォーカスがある状態で、画面最上部のメニューから、「ターミナル」→「環境設定」→「設定」→「詳細」と選択します。
2. 「ターミナルの宣言方法:」ドロップダウンリストから xterm-color を選択します。

ゾーンの準備ができているときはゾーンブート環境データセットがマウントされているべきである (7091692)

いずれかのゾーンが ready 状態の場合に、pkg(1) コマンドが失敗します。次のエラーメッセージが表示されます。

```
pkg: update failed (linked image exception(s)):  
Can't initialize child image (zone: zone) at path: zonepath/root
```

回避方法: zoneadm コマンドを使用してゾーンをブートまたは停止します。次に、pkg コマンドを再試行します。

接続されている **IEEE-1394** デバイスを切り離したり、電源切断したりすると、システムパニックになる (**7070912**)

接続されている IEEE-1394 デバイスを切り離したり、電源切断したりすると、システムパニックになることがあります。次のエラーメッセージが表示されます。

```
panic[cpu3]/thread=ffffff0010633c20:  
genunix: [ID 335743 kern.notice]  
BAD TRAP: type=e (#pf Page fault) rp=ffffff0010633960  
addr=8 occurred in module "s1394" due to a NULL pointer dereference
```

回避方法: 接続されている IEEE-1394 デバイスを切り離したり、電源切断したりしないでください。

automount サービスが無効になっていると、**useradd** が、ホームディレクトリにアクセスできないユーザーを作成する (**7070558**)

automount サービスが無効になっている場合、アカウントが **useradd(1M)** コマンドを使って作成されたユーザーはログインできません。この問題は、`/etc/passwd` ファイル内のホームディレクトリの指定が、そのホームディレクトリの実際のパス名に対応していないために発生します。次のエラーメッセージが表示されます。

```
No directory!
```

回避方法: **automount** サービス (`svc:/system/filesystem/autofs:default`) を無効にしないでください。

automount サービスを有効にする必要があるのは、インストール時に作成された初期アカウントを含む既存のユーザーアカウントが **automount** サービスに依存するためです。**automount** サービスを無効にすることを選択した場合は、`/etc/passwd` ファイル内の各ユーザーのホームディレクトリエントリを、そのホームディレクトリの実際のパス名を指定するように手動で編集してください。

SPARC: ダイレクト I/O を使用してマルチソケット T シリーズシステム上の主ドメインから複数の PCIe スロットを削除すると、ブート時にシステムパニックになることがある (7100859)

ダイレクト I/O 機能を使用してマルチソケット SPARCT シリーズシステムから複数の PCIe スロットを削除すると、ブート時にシステムパニックになることがあります。ldm remove-io コマンドを使用すると、複数の PCIe スロットを削除できます。この問題は、類似したパス名を持つ PCIe スロットが ldm remove-io コマンドを使用して削除されたあと、システムがリブートされたときに発生します。

ダイレクト I/O 機能についての詳細は、『Oracle VM Server for SPARC 2.1 管理ガイド』を参照してください。

たとえば、類似したパス名を持つ /SYS/MB/PCIE5 (pci@500/pci@2/pci@0/pci@0) スロットと /SYS/MB/PCIE4 (pci@400/pci@2/pci@0/pci@0) スロットを削除すると、Oracle Solaris 11 OS の次のブートでパニックになることがあります。

管理者が ldm list-io コマンドを実行すると、/SYS/MB/PCIE4 および /SYS/MB/PCIE5 PCIe スロットを削除したあとに、次の構成が表示されます。

```
# ldm list-io
IO                PSEUDONYM          DOMAIN
-----
pci@400           pci_0               primary
niu@480           niu_0               primary
pci@500           pci_1               primary
niu@580           niu_1               primary

PCIE              PSEUDONYM          STATUS  DOMAIN
-----
pci@400/pci@2/pci@0/pci@8 /SYS/MB/PCIE0     OCC     primary
pci@400/pci@2/pci@0/pci@4 /SYS/MB/PCIE2     OCC     primary
pci@400/pci@2/pci@0/pci@0 /SYS/MB/PCIE4     OCC
pci@400/pci@1/pci@0/pci@8 /SYS/MB/PCIE6     OCC     primary
pci@400/pci@1/pci@0/pci@c /SYS/MB/PCIE8     OCC     primary
pci@400/pci@2/pci@0/pci@e /SYS/MB/SASHBA    OCC     primary
pci@400/pci@1/pci@0/pci@4 /SYS/MB/NET0      OCC     primary
pci@500/pci@2/pci@0/pci@a /SYS/MB/PCIE1     OCC     primary
pci@500/pci@2/pci@0/pci@6 /SYS/MB/PCIE3     OCC     primary
pci@500/pci@2/pci@0/pci@0 /SYS/MB/PCIE5     OCC
pci@500/pci@1/pci@0/pci@6 /SYS/MB/PCIE7     OCC     primary
pci@500/pci@1/pci@0/pci@0 /SYS/MB/PCIE9     OCC     primary
pci@500/pci@1/pci@0/pci@5 /SYS/MB/NET2      OCC     primary
```

回避方法: 次のいずれかを使用してください。

- 類似したパス名を持つすべての PCIe スロットを削除しないでください。代わりに、1 つの PCIe スロットだけを削除します。

- PCIeカードを類似したパス名を持たないスロットに挿入します。それからダイレクタ I/O 機能で PCIe スロットを使用します。

tar コマンドによるテープからのアーカイブの抽出が失敗する (7028654)

tar コマンドによるアーカイブの内容の一覧表示やテープからのアーカイブの抽出が失敗する場合があります。次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
tar: blocksize = 0
```

注 - tar コマンドはディスク上のアーカイブを処理できます。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- tar コマンドを使用する前に、dd コマンドを使用してテープアーカイブをディスクにコピーします。たとえば、テープアーカイブ上の既存のファイルを更新するには、次のコマンドを入力します。

```
# dd if=/dev/rmt/6c of=disk.tar bs=10240
# tar uvf disk.tar file
# dd if=disk.tar of=/dev/rmt/6c bs=10240
```

- テープからのアーカイブを tar にパイプします。

```
# dd if=/dev/rmt/6c bs=10240 | tar tvf -
```

SPARC: SP が縮退モードの場合にシステムのブートが失敗する (6983290)

T3 および T4 システムでサービスプロセッサ (SP) が縮退モードになっていると、ホストシステムのリブートが失敗する可能性があります。

回避方法: ありません。

ネットワーク接続に関する注意事項

このセクションでは、Oracle Solaris 11 リリースのネットワークングに関する問題について説明します。

cxge ドライバの別名が既存ドライバの別名と競合する (7054074)

システムログファイル内に次の警告が表示されます。

```
WARNING: Driver alias "cxge" conflicts with an existing driver name or alias.
```

回避方法: この警告は無視してください。

-s オプション付きの **dladm show-aggr** コマンドが機能しない (7094923)

Oracle Solaris のリンク集積体は、`dladm` のサブコマンドを使用して管理できます。-s 付きの `dladm show-aggr` コマンドを使用すると、ある集積体を通過するネットワークトラフィックの統計カウンタのクエリーを行えます。

このリリースでは、`dladm` コマンドと `show-aggr` サブコマンドの組み合わせは、期待どおりに機能しません。エラーメッセージは一切表示されませんが、-s オプション付きの `dladm show-aggr` コマンドでは、すべての統計カウンタで常にゼロが報告されます。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- `dlstat` コマンドを使用します。
- `dlstat` コマンドを `show-link` サブコマンドと一緒に使用します。
- `dlstat` コマンドを `show-aggr` サブコマンドとともに使用します。

ローカルのホームディレクトリがマウントされないことがある (7082515)

ネットワーク情報サービス (NIS) が `auto_home` の代わりに、`auto.home` と呼ばれるマップを提供する環境では、ローカルのホームディレクトリが正常にマウントされないことがあります。この場合は、`automounter` がローカルシステム上の `/etc/auto_home` にアクセスしません。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- `/etc/auto_home` ファイルから `/etc/auto.home` ファイルへのシンボリックリンクを作成します。
- `/etc/auto_master` ファイル内で、`+auto_master` の行をファイルの末尾に移動します。

制御ドメインに仮想スイッチを追加したあと、最初のブートで **datalink-management** サービスがタイムアウトする (7087781)

制御ドメインに論理ドメイン仮想スイッチデバイスを追加し、最初のリブートを実行したあと、`svc:/network/datalink-management:default` サービスがタイムアウトします。このタイムアウトによって、システムはシステム保守モードに入ります。次のエラーメッセージが表示されます。

```
svc:/network/datalink-management:default:  
Method or service exit timed out. Killing contract 7.
```

```
network/datalink-management:default timed out:  
transitioned to maintenance (see 'svcs -xv' for details)
```

```
Requesting System Maintenance Mode  
(See /lib/svc/share/README for more information.)  
Console login service(s) cannot run
```

```
Enter user name for system maintenance (control-d to bypass):
```

回避方法: 論理ドメイン仮想スイッチを追加したあとは、通常のリブートの代わりに再構成リブートを実行します。

```
# reboot -- -r
```

システムがすでにシステム保守モードになっている場合は、スーパーユーザーとしてログインし、次のコマンドを入力してブートプロセスを再開します。

```
# svcadm clear datalink-management  
# exit
```

ipadm コマンド (7103136)

この Oracle Solaris リリースでは、ネットワークを構成する `ipadm(1M)` コマンドが期待どおりに機能しない可能性があります。システム上で `DefaultFixed` ネットワーク構成プロファイル (NCP) が有効になっていない場合は、`ipadm` コマンドが機能しません。

回避方法: `ipadm(1M)` コマンドを使用してネットワークを構成する場合は、次のコマンドを使用して `DefaultFixed` NCP プロファイルに切り替える必要があります。

```
# netadm enable -p ncp DefaultFixed
```

システム上で有効になっている NCP プロファイルのタイプを判断するには、`ipadm(1M)` コマンドを入力します。

```
# netadm list
```

DefaultFixed プロファイルが有効になっている場合は、このコマンドが次のメッセージを表示します。

```
netadm: DefaultFixed NCP is enabled; automatic network management is not available.  
'netadm list' is only supported when automatic network management is active.
```

このメッセージが表示されない場合、システム管理者は、次のコマンドを使用してこのプロファイルを有効にしてください。

```
# netadm enable -p ncp DefaultFixed
```

DefaultFixed プロファイルが有効になっていない場合は **ipadm** コマンドが機能しない (7105597)

システムを Oracle Solaris Express から Oracle Solaris 11 に更新したあと、システムのホスト名が `unknown` に設定されます。システムの `hostname` が DHCP または `bootparams` 構成データから取得されたときには、システムのホスト名が `unknown` に設定されません。

回避方法: 次のいずれかを使用してください。

- ホスト名を正しく設定するために、システムをリブートします。
- システムをリブートできない場合は、次のコマンドを入力してホスト名を手動で設定します。

1. # `svccfg -s svc:/system/identity:node setprop config/nodename = hostname`
2. # `svccfg -s svc:/system/identity:node refresh`
3. # `svcadm restart identity:node`

ストレージに関する問題

このセクションでは、この Oracle Solaris 11 リリースのストレージに関する問題について説明します。

fc-fabric SMF サービスを無効にすると、システムのブートで問題が発生する (6988653)

`svc:/system/device/fc-fabric:default` サービスが無効になっていると、システムのレポートが正しく行われないう可能性があります。シングルユーザーやマルチユーザーのマイルストーンを含む、依存する多くのサービスが実行に失敗する可能性があります。次のエラーメッセージが表示されます。

```
root@unknown:~# svcs -x
svc:/system/device/fc-fabric:default (Solaris FC fabric device configuration.)
State: disabled since Wed Sep 07 01:26:25 2011
Reason: Disabled by an administrator.
See: http://sun.com/msg/SMF-8000-05
See: man -M /usr/share/man -s 1M cfgadm_fp
Impact: 34 dependent services are not running.
```

回避方法: fc-fabric サービスを無効にしないでください。fc-fabric サービスがすでに無効になっている場合、サービスをシングルユーザーモードで有効にします。

iSCSI または SAS デバイスで **SCSI-2 reserve** コマンドを利用すると、システムパニックが発生する (7075285)

ホストの iSCSI または SAS デバイスが SCSI-2 reserve コマンドで予約されている場合は、それらを持つホスト上で SAN (Storage Area Network) 上の一部のイベントがパニックを発生させる可能性があります。HBA ドライバ `iscsi(7D)`、`mpt(7D)`、または `mpt_sas(7D)` で管理され、I/O マルチパスで使用されているデバイスだけが、影響を受けます。そのような SAN イベントの例は、パスオフラインです。

-vD オプション付きの `prtconf` コマンドを使用すると、システム内のデバイスやドライバを特定できます。

注-SVM ディスクセットを使用し、HBA ドライバの最上位に `auto-take` なしで構成されたシステムは、内部的に SCSI-2 予約を利用するため、影響を受けます。

回避方法: 影響のある構成での `auto-take` がいない状態で SCSI-2 予約や SVM ディスクセットを使用しないでください。

デスクトップに関する問題

このセクションでは、この Oracle Solaris 11 リリースのデスクトップに関する問題について説明します。

新規インストール後に **Evolution** アプリケーションがクラッシュする (7077180)

Oracle Solaris のインストール後に Evolution 電子メールアプリケーションが起動しません。

回避方法: Evolution のインストール後に、ログアウトしてから再びログインします。アプリケーションが正常に起動します。

SPARC: USB キーボード、マウス、および物理モニターに関するデスクトップの問題 (7024285)

物理キーボード、マウス、またはモニターを使用しているときに、Oracle Solaris デスクトップ内の端末ウィンドウを何度も開いて使用しようとする、文字やマウスの制御が失われることがあります。

この問題の原因は、マイクロフレームの消失によって発生するエラーである可能性があります。これらのエラーは、全速または低速の USB 1.0 または 1.1 キーボードおよびマウスデバイスがシステム上のオンボード USB 2.0 ハブの下に USB ポートに接続されているときに発生します。しかし、キーボードおよびマウスデバイスがシステムの USB ポートに接続され、それが OHCI (USB 1.0 または 1.1) ドライバに手動でインストールされた内部ハブに接続されているときは、これらのエラーは発生しません。

注- 仮想キーボードおよびマウスを使用している場合は、ハブの下にすべてのデバイスが強制的に低速で動作します。デバイスは引き続き機能しますが、低速の USB 1.0 または 1.1 で動作します。

回避方法: /kernel/drv/ehci.conf ファイルの ehci_forced_port_to_companion 変数の値を設定します。この変数の値は、EHCI (USB 2.0) ドライバが USB コントローラ上の特定のポートの制御を解放するために使用します。この回避方法 (CR 7102052) は、[Oracle Solaris 11 パッチ \(SRU バージョン 3\)](#) で利用可能です。

ehci_forced_port_to_companion 変数の値は、プラットフォームのタイプと使用される USB デバイスのタイプによって異なります。次の表に、推奨される USB コネクタの使用法と対応する ehci_forced_port_to_companion 変数の値を示します。

表 3-1 推奨される USB コネクタの使用法と値

SPARC プラットフォーム	USB デバイスのタイプ	推奨される USB コネクタの使用法	/kernel/drv/ehci.conf ファイルの ehci-port-forced-to-companion 変数の値
T3-1、T3-2、T4-1、T4-2	物理キーボードまたはマウス	前面 USB コネクタを使用します	4
T3-4、T4-4	物理キーボードまたはマウス	背面 USB コネクタを使用します	3
T3-1、T4-1、T3-2、T4-2、T3-4、T4-4	仮想キーボードまたはマウス	なし	2

この回避方法を実装するには、次の手順を実行します。

1. USB デバイスを接続します。
各種のプラットフォーム上のデバイスに対して推奨される USB コネクタは、表 3-1 に一覧表示されています。
2. **Oracle Solaris 11 パッチ (SRU バージョン 3)** を適用します。
3. `/kernel/drv/ehci.conf` ファイルの `ehci-port-forced-to-companion` 変数の値を設定します。
たとえば、SPARC プラットフォームが T3-4 であり、物理キーボードを使用している場合は、`ehci-port-forced-to-companion=3` を設定します。
この変数に設定できる値の詳細については、表 3-1 を参照してください。
4. システムをリブートします。

```
# init 6
```

グラフィックスと画像処理に関する問題

このセクションでは、Oracle Solaris 11 リリースのグラフィックスと画像処理に関する問題について説明します。

x86:NVIDIA グラフィックスによるレイヤーアクセラレーションによって **Firefox** が終了する可能性がある (7095998)

Firefox のレイヤーアクセラレーションが以前に有効化されていた場合、Oracle Solaris 11 にバンドルされている NVIDIA グラフィックスドライバによって、Firefox が終了する可能性があります。この問題が発生は、Flash コンテンツを含むページを表示した場合のみ発生します。次のエラーメッセージが表示される可能性があります。

```
$ firefox
Abort (core dumped)
```

注-レイヤーアクセラレーションはデフォルトでは無効になっています。

回避方法: 次の手順を実行してレイヤーアクセラレーションを無効にします。

1. ブラウザのアドレスバーで `about:config` と入力します。
2. 保証ページで「細心の注意を払って使用する」ボタンをクリックします。
3. 「フィルタ」テキストフィールドで **layer** と入力します。

4. 次の行をダブルクリックしてデフォルト設定を復元します。

```
layers.acceleration.force-enabled user set boolean true
```

Intel グラフィックスチップセットでビットマップ コンソールが正しく表示されない (7097468)

Intel グラフィックスアダプタが搭載された一部のシステムでは、Xorg サーバーを実行したあと、テキストモードコンソールが正しく表示されません。Xorg サーバーからテキスト仮想端末に切り替えると、コンソールが判読可能な文字ではなく垂直バーとして表示されます。

回避方法: ビットマップコンソールを無効にします。代わりに、VGA モードのテキストコンソールを使用します。

コンソールを `force-text` GRUB ブートオプションに設定する手順については、『[x86 プラットフォーム上の Oracle Solaris のブートおよびシャットダウン](#)』の第 6 章「[x86 ベースシステム上のブートパラメータの変更\(タスク\)](#)」を参照してください。

x86: NVIDIA グラフィックスチップセット上で ビットマップコンソールが正しく表示されない (7106238)

NVIDIA グラフィックスアダプタが搭載された一部のシステムでは、Xorg サーバーが実行されたあと、テキストモードコンソールが正しく表示されません。Xorg サーバーからテキスト仮想端末に切り替えると、コンソールが判読可能な文字ではなく垂直バーとして表示されます。

回避方法: ビットマップコンソールを無効にします。代わりに、VGA モードのテキストコンソールを使用します。

コンソールを `force-text` GRUB ブートオプションに設定する手順については、『[x86 プラットフォーム上の Oracle Solaris のブートおよびシャットダウン](#)』の第 6 章「[x86 ベースシステム上のブートパラメータの変更\(タスク\)](#)」を参照してください。

ローカリゼーションに関する注意事項

このセクションでは、この Oracle Solaris 11 リリースのローカリゼーションに関する問題について説明します。

UTF-8 以外のロケールで、非 GTK アプリケーションから ATOK 言語エンジンへの接続が失敗する (7082766)

UTF-8 以外のロケールで IIIMF 入力方式フレームワークが ATOK 日本語言語エンジンと組み合わせて使用されているときは、非 GTK アプリケーション (X および Java アプリケーション) が入力方式フレームワークへの接続に失敗します。

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- IBus 入力方式フレームワークを Anthy 言語エンジンと組み合わせて使用します。
- IIIMF 入力方式フレームワークを Wnn 言語エンジンと組み合わせて使用します。

Trusted Extensions 環境での入力方式の問題

このセクションでは、Trusted Extensions 環境の入力方式に関する問題について説明します。

非大域ワークスペースで IBus 言語パネルが表示されない (7082198)

非大域ワークスペースで IBus 言語パネルが表示されません。

回避方法: 端末から、または Oracle Solaris デスクトップから、IBus 設定ツールを起動します。

- コマンド行から IBus 設定ツールを起動するには、次のコマンドを入力します。

```
# ibus-setup
```
- Oracle Solaris Desktop から IBus 設定ツールを起動するには、「システム」→「設定」→「IBus 設定」を選択します。

「IBus 設定」ウィンドウで、「言語パネルを表示」リストから「常時」または「アクティブ時」オプションを選択します。

入力方式セクタツールが入力方式フレームワークの変更に失敗する (7082235)

入力方式セクタツールが入力方式フレームワークの変更に失敗する場合があります。

回避方法: 入力方式フレームワークを変更するには、次を行います。

1. Oracle Solaris Trusted Extensions の復旧セッションにログインします。
2. 端末から入力方式フレームワークを変更するには、`imf-selector` コマンドを使用します。
3. 入力方式フレームワークを選択します。
選択された入力方式フレームワークが、すべてのラベル付きワークスペースで使用されます。

IIM 入力方式構成ツールがトラステッドパス内で実行される (7082222)

IIM 入力方式構成ツールは、「設定」メニューバーから起動された場合には、トラステッドパス内で実行されます。

回避方法: 各ラベル付きワークスペースの IIMF を構成するには、そのワークスペース内の端末から `iim-properties` コマンドを使用します。

```
# iim-properties
```


◆ ◆ ◆ 第 4 章

更新の問題

この章では、Oracle Solaris 11 への更新中に発生する可能性のある問題について説明します。

更新のバグ

Oracle Solaris 11 への更新時に、次のバグが発生する可能性があります。

パッケージマネージャーを使用して **Oracle Solaris 11 Express** を **Oracle Solaris 11** に更新できない (19022)

パッケージマネージャーを使用して Oracle Solaris 11 Express (ビルド 151a) を Oracle Solaris 11 に更新することはできません。

回避方法: 更新を実行するには、`pkg(1)` コマンド行ユーティリティーを使用します。詳細は、[14 ページの「Oracle Solaris 11 Express を Oracle Solaris 11 に更新する方法」](#)を参照してください。

更新中にディレクトリが空でないか、または予期しないメッセージが表示される (7019792)

Oracle Solaris 11 Express から Oracle Solaris 11 への更新中に、次のメッセージが表示されることがあります。

```
The following unexpected or editable files and directories were salvaged while executing the requested package operation; they have been moved to the displayed location in the image:
```

followed by one or more directories named as such:

dir → /tmp/*tmpdir*/var/pkg/lost+found/*dir-timestamp*

回避方法: このメッセージは無視してください。表示されているディレクトリは、更新されたシステム上でパッケージ化されなくなりました。ただし、ディレクトリの内容は、更新されたブート環境内の /var/pkg/lost+found ディレクトリに見つかります。

廃止されたパッケージに対して依存関係を持つ製品 (7106586)

pkg://opensolaris.org/ からの特定のパッケージがインストールされている場合、システムを Oracle Solaris 11 に更新できない可能性があります。次の表に、これらのパッケージの一覧を示します。

パッケージ名	説明
amp-dev	AMP 開発クラスタ
eclipse	Eclipse IDE
java-dev	Java 開発クラスタ
libnb-apisupport	NetBeans クラスタ API サポート
libnb-enterprise	NetBeans Java EE support サポート
libnb-groovy	NetBeans Groovy サポート
libnb-identity	NetBeans クラスタ識別情報
libnb-java	NetBeans Java サポート
libnb-profiler	NetBeans プロファイラ
mq41	Message Queue 4.1
netbeans	NetBeans IDE
netbeans-java	NetBeans Web および Java Enterprise Edition (EE)
netbeans-javase	NetBeans Java Standard Edition (SE) ディストリビューション
openoffice	OpenOffice.org バージョン 3.1.0
openoffice-sdk	OpenOffice.org バージョン 3.1.0 用の SDK
service/network/message-queue-41	Message Queue 4.1

パッケージ名	説明
web/glassfish-2	GlassFish Java EE 5 Server

回避方法: Oracle Solaris 11 に更新する前に、これらのパッケージをアンインストールします。最新バージョンについては、次の Web サイトを参照してください。

- Eclipse: <http://eclipse.org/>
- Glassfish: <http://glassfish.java.net/>
- NetBeans: <http://netbeans.org/>
- Open Message Queue: <http://mq.java.net/>
- OpenOffice.org: <http://openoffice.org/>

CUPS が、Oracle Solaris 11 のデフォルトの印刷サービスとして LP 印刷サービスを置き換える

Oracle Solaris 11 のデフォルトかつ唯一の印刷サービスは、Common UNIX Printing System (CUPS) です。Oracle Solaris 10 や以前のリリースでは、LP 印刷サービスがデフォルトの印刷サービスです。LP 印刷サービスは Oracle Solaris 11 から削除されました。

Oracle Solaris 11 をインストールしたり、このリリースにアップグレードしたりする場合、LP 印刷サービスを使用して構成されたプリンタのすべてを、CUPS で動作するように構成し直す必要があります。なぜなら、それらのプリンタはもう動作しないからです。プリンタは、次のいずれかの方法で構成し直すことができます。

- `lpadmin(1M)` コマンドを使用する
- <http://localhost:631> にある CUPS 管理 Web ブラウザインタフェースを使用する
- Oracle Solaris Desktop から、および `system-config-printer` としてコマンド行からアクセス可能な CUPS 印刷マネージャー GUI を使用する

注 - 未変更の Oracle Solaris 11 Express を実行している場合は、CUPS がすでにデフォルトの印刷サービスになっています。Oracle Solaris 11 に更新する場合は、既存の印刷待ち行列を CUPS を使用して構成し直す必要は一切ありません。ただし、LP 印刷サービスに切り替え、LP 印刷コマンドを使用してプリンタを構成した場合は、更新後にそれら既存のプリンタを CUPS を使用して構成し直す必要があります。

CUPS で動作するように印刷環境を設定する手順については、『Oracle Solaris の管理: 一般的なタスク』の第 15 章「CUPS を使用したプリンタの設定と管理 (手順)」を参照してください。

更新後に、**syslog** が **/etc/ail/aliases.db** 別名データベースが古いと報告する (7096745)

ローカル別名 (/etc/mail/aliases) が追加されたことのないシステム上で、以前の Oracle Solaris リリースから Oracle Solaris 11 に更新したあと、次のログメッセージが表示されることがあります。

```
hostname sendmail[<pid>]:
[ID 702911 mail.info] alias database /etc/mail/aliases.db out of date
```

このメッセージは無害であり、システムに影響を与えません。

回避方法: root 特権で `/usr/sbin/newaliases` を実行します。

未構成ロケールファセットでのデフォルト言語の問題 (7073516)

Oracle Solaris 11 では、ローカライズ版のインストールは、Image Packaging System (IPS) のオプションコンポーネントの1つである「ファセット」と呼ばれるメカニズムによって制御されます。Oracle Solaris 11 の初期インストール中に、ファセットは次の表に示されている言語 (ロケール) を選択するように初期構成されます。

言語	ロケール
中国語 (簡体字)	zh_CN.UTF-8
中国語 (繁体字)	zh_TW.UTF-8
英語	en_US.UTF-8
フランス語	fr_FR.UTF-8
ドイツ語	de_DE.UTF-8
イタリア語	it_IT.UTF-8
日本語	ja_JP.UTF-8
韓国語	ko_KR.UTF-8
ポルトガル語 (ブラジル)	pt_BR.UTF-8
スペイン語	es_ES.UTF-8

Oracle Solaris 11 Express から Oracle Solaris 11 に更新するときに、ファセットはデフォルトでは構成されません。この場合、デフォルトですべての言語が暗黙的に選択されてインストールされます。

回避方法: 選択された言語でシステムを構成する場合は、更新後に次のいずれかの回避方法を選択します。

- パッケージマネージャーを使用して言語を選択します。
 1. パッケージマネージャーで、「編集」→「設定」→「オプションのコンポーネント」を選択します。
 2. 「次の言語のみのインストール」オプションを選択します。
 3. リストから言語 - 地域の組み合わせを選択します。次に「了解」をクリックします。
- pkg(1) コマンドの `-change-facet` オプションを使用します。Oracle Solaris 11 初期インストールのデフォルト言語セットを選択するようにファセットを設定する場合は、`pkg` コマンドを使用します。

```
# pkg change-facet \  
'facet.locale.*=False' \  
'facet.locale.de=True' \  
'facet.locale.de_DE=True' \  
'facet.locale.en=True' \  
'facet.locale.en_US=True' \  
'facet.locale.es=True' \  
'facet.locale.es_ES=True' \  
'facet.locale.fr=True' \  
'facet.locale.fr_FR=True' \  
'facet.locale.it=True' \  
'facet.locale.it_IT=True' \  
'facet.locale.ja=True' \  
'facet.locale.ja_*=True' \  
'facet.locale.ko=True' \  
'facet.locale.ko_*=True' \  
'facet.locale.pt=True' \  
'facet.locale.pt_BR=True' \  
'facet.locale.zh=True' \  
'facet.locale.zh_CN=True' \  
'facet.locale.zh_TW=True'
```

`-change-facet` オプションの使用方法については、`pkg(1)` のマニュアルページを参照してください。

